

# 甲南女子大学教職課程における生活科授業の実践

相澤 亮太郎

A report on the class of “living environment studies” given in the teacher training course of Konan Women’s University.

AIZAWA Ryotaro

**Abstract** : This is a report on the classroom practice of “living environment studies” given in the teacher training course of Konan Women’s University in the first semester of 2014. This is a required class in the elementary school teacher training course. The author has tried to improve this class for five years, and students satisfaction level improved. This report presents all the classroom practices, achievements and agendas.

抄録：本報告は、2014年度前期に甲南女子大学において行った生活科の授業実践を紹介するものである。生活科授業は、小学校教員免許状を取得する上で必須の授業である。筆者は、5年前にこの授業の担当者となり、授業改善を重ねてきた。多くの受講者は、授業評価アンケートにおいて高い満足度を示している。全15回分の授業内容を紹介した上で、本授業の成果と課題を示す。

## 1. はじめに

1989年の学習指導要領改訂によって生活科が新設されてから、25年が経つ。小学校低学年における理科及び社会科が廃止された代わりに新たに登場した生活科は、「体験的活動を通して自立への基礎を養う」科目として立ち上げられた。当初は「這い回る経験主義」<sup>1</sup>と揶揄された生活科授業も、現在では、小学校低学年における重要な科目の一つとして広く認識されている。生活科授業の意義や多様な実践については既に数多の実践者や研究者によってまとめられてきたが、例えば近年では、「小1プロブレム」<sup>2</sup>をはじめとした現在の教育課題を解決する枠組みとしても、生活科授業に寄せられる期待は大きい。

教育現場における生活科授業の重要な役割を考えれば、教員養成課程における授業内容も精査されなければならない。これまで、教員養成系の大学や各種の学会<sup>3</sup>から、数多くの実践報告や問題提起がなされてきた<sup>4</sup>。生活科授業に関する理論的な側面を整理し、豊

かな授業実践にも触れながら、生活科の授業力を習得するカリキュラムを実現するためには、何より、各授業担当者の日々の授業改善に依るところが大きい。しかし、教職課程における生活科授業担当者の多くが、生活科教育の専門家ではないことについては既に指摘されている通りであり（鈴木：2006）、甲南女子大学においても同様の状況にある。本稿では、甲南女子大学の小学校教員養成課程において生活科関連授業を担当してきた筆者による授業実践を報告し、今後、教員養成課程におけるより一層優れた生活科授業を実現していく手がかりとしたい。

2014年度現在、甲南女子大学における生活科関連授業は、2コマが開講されている。一つは、「教職に関する科目」としての「初等教科教育法（生活）」であり、これは総合子ども学科の2年前期に配当されている。また「教科に関する科目」として「生活概論」が、総合子ども学科の4年前期に配当されている。いずれの科目も筆者が単独の授業担当者となっている。後者の「生活概論」は、選択必修科目として4年次の履修に設定されているため、小学校教員を目指す多くの学

生にとって、生活科関連の授業を受講するのは 2 年前期の「初等教科教育法 (生活)」のみとなっている。つまり、「初等教科教育法 (生活)」は、小学校教師として現場に立つまでに生活科授業を学ぶ唯一の機会と言える。そのため、この授業においては、生活科授業の指導法を学ぶことを軸としながらも、生活科授業の理念やカリキュラム構成を学び、さらには多様な授業実践や教材研究にも触れるというような、「生活科についてひと通り学べる」授業を目指す必要があると筆者は考え、授業内容を充実させてきた。有田 (1993) が言うように、学生は「教えられた通りに教える」のであれば、大学での体験的活動を通じた学びは、学生が将来教師として現場で取り組む実践に直結する。一方で、教職課程における学びが「這い回る経験主義」とならないような工夫も求められる。次章において、2014 年度前期の初等教科教育法 (生活) において実施した具体的な授業内容を紹介したい。

## 2. 初等教科教育法 (生活) の記録

### 2-1 本授業の到達目標

シラバスには、本授業の到達目標として次の 4 点を示した。

- ①小学校生活科の成り立ちや特色について理解を深める。
- ②生活科授業を計画し実践する上で必要な知識を身につける。
- ③生活科授業の実践事例を通じて、生活科授業の目標や授業方法等について理解を深める。
- ④年間計画及び単元計画、指導案を自ら立案することができる。

毎年、授業内で受講者が抱えている生活科のイメージを確認している。多くの受講者は、自らの経験を振り返りながら漠然と「体験的な活動」「社会科と理科が混ざったもの」という印象を持っている。確かに、生活科授業には理科や社会的な要素を多く含んでいるが、生活科授業独自の理念や実践について幅広く丁寧に理解を深めることが、生活科授業の指導力を身につける第一歩であると筆者は考えている。そこで本授業では、個別具体的な授業実践や単元の内容を取り上げながらも、その都度、生活科授業全体に共通する「児童の気付きと成長」、そして「教師の支援」に着目させることを意識した。実際に児童の立場で活動に取り組んでみる側面と、教師の立場で授業を捉える側面を両立させながら、生活科授業の本質に迫ることを目指

した。15 回分の授業内容は次節の通りである。なお、2014 年度前期の本授業の履修者数は 61 名であり、5 人掛けの固定式の机イスが並ぶ 78 名定員の教室で大半の授業を行った。

### 2-2 初等教科教育法 (生活) の授業内容

#### ○第 1 回 (4 月 7 日) 「自己紹介と春探し」

初回の授業ということで、冒頭、15 回分の授業構成と授業の目標、成績評価の方法等について説明した。続いて、受講生同士の自己紹介活動を行った。自己紹介の活動は、小学 1 年生が 4 月に入学し、最初の生活科の授業として取り込まれる活動を意識したものである。「教室内を歩き回りながら受講生同士 20 人と握手をして、その人のサインをもらうように」と指示し、10 分程度、その活動に取り組んだ。引き続いて、3 名程度のグループを作り、20 分間、教室を出て大学敷地内を歩きながら「春」を探す活動を行った。教室に戻ってからは、各グループの代表者に、自分たちが見つけてきた「春」を板書させ、全員で共有した。その上で、「生活科授業において、このような春を探す活動にはどのような意味があるのか、予想せよ」という課題を提示し、グループ内で話し合いの活動を行った。最後に感想用紙を配布し、話し合いをふまえて、課題についての自らの考えを記入させた。予想を立てる形で記入させた感想用紙には、「自然とふれあうことが大切なのではないか」「友だちとふれあうことやコミュニケーションの力を身につけるためにするのはないか」等の意見が多く見られた。

#### ○第 2 回 (4 月 14 日) 「生活科の意義と背景」

この日の授業は、まず数人のグループを作り、グループ内で話し合いながら、受講者自身が小学生時代に経験した生活科授業を思い出す活動に取り組んだ。思い出した内容は、各グループの代表者が黒板に書き出し、内容を全員で共有した。その上で、前時の最後に記入させた感想用紙のうち、8 名分を掲載した資料を配付し、前時の振り返りを行った。前時において「春を探す活動の意義」について予想を立てたことを思い出しながら、学習指導要領に示された生活科授業の目標や学習対象について大まかな説明を行った。さらに、生活科授業の意義について理解を深めるために、「現代社会において、子どもたちが過ごす環境はどのように変わったのか」と問い、例として、仲間、時間、空間の三つの「間」が失われつつある状況を説明した。関連して、プレーパーク (冒険遊び場) 等の取り組みが各地で広がりを見せつつある状況を紹介する映像を視

聴した。授業終了時には、「この日の授業で学んだことや考えたこと」について、感想用紙に記入させた。感想用紙には「確かに都市化が進んで子どもが遊ぶ空間がない」「習い事が増えて遊ぶ時間がなくなっているかもしれないが、習い事からも大切なことを学べるから、どちらがよいというわけではない」「プレーパークのような場所が多くあれば、わざわざ生活科の授業で体験的な活動をしなくてもよい」「安全と経験を両立させる必要があるが、なかなか難しいことだ」等、多様な感想や意見が見られた。

#### ○第3回(4月21日)「栽培活動と生活科における気付き」

冒頭、前時の感想用紙8名分を記載した資料を配付し、前時の振り返りを行った。この日の授業はまず、生活科における気付きの重要性を考えるための教材として、OHCを利用しながら、『ムーミンのともだち』<sup>5</sup>の読み聞かせを行った。この絵本は、トーベ・ヤンソンによるオリジナル作品ではなく、「ムーミン」のキャラクターや舞台の設定に沿いながら二次的に創作された作品である。本作は、晩秋のムーミン谷において、冬の備えが進む植物や動物たち、家族や仲間とのやりとりの中で、季節の移り変わりについてムーミンが気付きを深めていくというストーリーである。授業では、読み聞かせの後、ムーミンがどのように気付きを深めていくのかを改めて解説し、生活科授業における気付きの重要性と関連づけた。その上で、小学校における生活科及び体験的活動の記録映像『学校農園でいきいき農業体験』(農山漁村文化協会・2003年)を視聴した。本映像は、農作物栽培の活動について、春から秋までの取り組みを記録し紹介する内容である。視聴の際には、「栽培活動を通じて子どもたちがどのように気付きを深め、どのように成長したのか」について考えるよう指示し、視聴終了後に感想用紙にまとめさせた。感想用紙には「充実した栽培活動ができる環境はうらやましい」「長期的継続的な取り組みの中で気付きを深め子どもたちが成長するのだと思う」等の感想が多く見られた。

#### ○第4回(4月28日)「栽培活動における気付き」

冒頭、前時の感想用紙8名分を記載した資料を配付し、振り返りを行った。この日の授業はまず、「生活科授業では、なぜ知識として教えず、体験から気づかせることが大事なのか」と問い、そのことについてグループで話し合う活動に取り組んだ。複数のグループをランダムに指名し、話し合いの内容を口頭にて発表させた上で、低学年児童の発達特性や、感覚的・情緒的な側面を重視する生活科授業の特性を解説した。続

いて、前時に視聴した栽培活動の実践記録を思い出しながら、「視聴した栽培活動の実践における児童の気付き」を10個以上考えるように指示した。グループ内で出された意見については、代表者にそれぞれ板書をさせた。その上で、筆者が板書された気付きを類型化して整理する作業を行った。その際、気付きの階層性についての資料を配付して説明を加え、質の高い気付きが得られる生活科授業のあり方を考えることの重要性を指摘した。この日の感想用紙には「質の高い気付きが得られる生活科授業を計画することの大切さを学んだ」「教えられるのではなく、経験を通じて自分で気づくことが大切だと思った」等の感想が多く見られた。生活科授業の本質となる「気付き」についての理解を深めつつあることを確認することができた。

#### ○第5回(5月12日)「もの作り活動と教師の支援」

冒頭、前時の感想用紙8名分を記載した資料を配付し、前時の振り返りを行った。この日の授業では、質の高い気付きを促すための生活科授業における教師の役割について理解を深めるため、生活科授業実践の記録映像『紙を作る・ヤギを育てる』を視聴した。同映像は、1992年に岩波書店が製作したものであり、同年に出版された『シリーズ授業⑥ 生活科 紙を作る・ヤギを育てる』(稲垣忠彦ほか編)において、充実した解説が示されている。映像には、牛乳パックからハガキを作る活動に取り組む児童の様子が淡々と記録されている。児童が活動に取り組む間、教師はほとんど手や口を出さず、見守りを中心に行っている。筆者は本映像の視聴に先立って、「児童に対して、教師はどのような支援を行っているのか」に注目するよう指示した。視聴後、グループ内で感想を述べ合い、指示された視点について話し合いを行った上で、感想用紙を配布し「気づいたことや分かったこと、感想など」を記入するよう指示した。感想用紙には「子どもたちから失敗を経験する機会を奪ってはならないと思った」「教師が見守りに徹することによって児童の助け合いの場面が生まれている」等の記述が多く見られた。授業の終わりには、「ピカピカひかるどろだんごづくり」の指導案を作成する課題についての説明を行った。大まかな単元の流れを説明した上で、本時の指導案を作成する課題を与えた。その際、児童の気付きや教師の支援を「発言」の形で記入するというルールを指示した。

#### ○第6回(5月19日)「教師の支援と指導案作り」

冒頭、前時の感想用紙8名分を記載した資料を配付し、前時の振り返りをしながら、生活科授業における教師の支援について解説した。続いて、前回の授業に

において提示した課題「ピカピカひかるどろだんごづくり」の指導案について、周囲の受講者同士で内容を確認しながら、自ら赤ペンで加筆修正を加える作業に取り組んだ。前回の授業において視聴した授業記録映像では、教師は見守りを基本とした姿勢で授業に臨んでいたが、場面によっては積極的な声かけが求められる。受講者自身が授業者となることを想定すれば、個々の児童の状況に合わせて適切な声かけや支援を考える力が求められる。この日の授業では、続いて「おもちゃづくり」の授業実践に関する資料を配布し、生活科授業における教師の支援や、児童同士の支え合いの場面を作り出す工夫について説明した。授業終了時に、赤ペンによって加筆修正された「どろだんごづくり」の指導案を回収した。この日作業した指導案は、添削の上で第 8 回目の授業において返却した。

#### ○第 7 回 (5 月 26 日) 「生活科設置までの動きと学習指導要領」

この日は天候が悪かったため、予定していた「夏探し」の活動は次週に行うこととし、別の内容を用意した。新しい教科としての生活科がスタートするまでに各種の審議会から出された答申や報告書等の内容をまとめた資料を配布し、その内容を要約したスライドを提示しながら、生活科設立に至るまでの議論を簡単に紹介した。ここで説明した内容については、後日レポート課題の一つとしてまとめてもらうことを予め伝えた上で授業を進めた。また、現行の学習指導要領の内容に関するワークシートを配布し、スライドを提示しながら解説を加え、要点をまとめる活動に取り組んだ。

#### ○第 8 回 (6 月 2 日) 「五感で夏探し」

第 6 回の授業において取り組んだ「ピカピカひかるどろだんごづくり」の指導案を返却した。提出された指導案の多くにおいて、子どもの気付きを深めるための声かけが不十分であることを指摘し、その点について再度解説した。この日の授業では、生活科においては自然や周囲への環境に対する感覚を養うことが重要であると前置きした上で、レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』(新潮社、1996 年)を紹介した。続いて、周囲の自然や環境に対して、五感を通じて気付きを深めることの大切さについて理解を深めることを目的とし、大学内の敷地を散策しながら五感を使って夏を探す活動に取り組んだ。まず全員に大学内の建物配置図を配布し、発見した夏を五感に分けて記録するよう予め指示した。受講者は、第 1 回目の授業で取り組んだ春を探す活動を意識しながら、グループごとに五感を使って季節の変化を見つけ、教室に戻って板

書し、全体で共有した。その上で、視覚、触覚、味覚、嗅覚、聴覚のうち、視覚から得られる情報に頼りがちであることを指摘し、五感をフル活用する生活科授業の計画を立てる必要性について説明した。

またこの日の授業において、レポートの課題を提示した。レポートは、生活科授業が成立するまでの過程を整理しまとめることと、生活科授業において大切なことについて論じるという 2 つの内容について、それぞれ作成することを指示した。

#### ○第 9 回 (6 月 9 日) 「生活科マップと生活科カレンダー」

冒頭、前時の授業内容を振り返りながら、生活科の授業を通じて、子どもたちが認識する世界をより豊かなものにすることができる点を再度強調した。この日の授業では、子どもの空間認識について理解を深めるため、子どもが描いた絵や地図を紹介し、認知や表現の発達について解説した。さらに、生活科授業を立案するために、地図上に樹木の種類やどのような活動が可能なのか等の情報を記した「生活科マップ」や、年間計画を立案するために季節の変化や年中行事などをまとめた「生活科カレンダー」を紹介した。授業のまとめとして、身近な四季の移り変わりや年中行事、二十四節気を把握するための「生活科カレンダー」を作成するためのワークシートを配布し、調べて記入する活動に取り組ませた。

#### ○第 10 回 (6 月 16 日) 「飼育活動と命の学習」

この日の授業では、生活科における飼育活動の実践について理解を深めるために、飼育活動の実践記録映像を視聴した。教材とした映像は、総合学習のモデルとなる先進的な取り組みを続けてきた長野県伊那市の伊那小学校の実践を取り上げた記録映像『生命を学ぶわくわく飼育体験』(農山漁村文化協会・2003 年)である。本映像では、子どもたちが家畜の飼育活動に意欲的に活動に取り組みながら、学びを深め、成長する姿を見ることができる。また飼育活動における教師や専門家(本映像では畜産農家)の役割や協力のあり方についても学ぶことができる。感想用紙には「命を学ぶことの大変さと大切さを知った」「低学年の子どもたちが友だちと支え合い学び合う様子が印象的であった」「体験的活動の奥深さや重要性を学んだ」との記述が多く見られた。

#### ○第 11 回 (6 月 23 日) 「伝統遊び」

冒頭、前時の感想用紙 8 名分を記載した資料を配付し、振り返りを行った。この日の授業は、机とイスを動かすことができる教室に移動し、伝統遊びを体験する授業を行った。けん玉を 2 人に 1 つ程度配布し、は

じめにいくつかの基本的な技を紹介した。続いて学生が各自練習する時間を取ると、「懐かしい」という学生も、「やったことない」という学生も、集中してけん玉に取り組む、技やコツを教え合う様子が見られた。次は紙飛行機を作って飛ばす活動に取り組んだ。はじめにA4用紙を2枚渡して「まず、1枚を自由に折って飛ばすように」と指示した。続いて、よく飛ぶ紙飛行機の折り方を2種類紹介し、同様に飛ばして遊ぶよう指示した。これらの活動を体験した上で、感想用紙を配布し、「伝統遊びを通じて、子どもたちに味わわせたい楽しさやおもしろさは何か。伝統遊びの活動を通じてどのような気付きを深めたいか」について考えたことを記入させた。感想用紙には、「今は携帯ゲームにはまる子どもたちも多いが、体を使って遊ぶことの面白さを伝えたい」「コツや技を教え合い、競い合い、達成感が得られる遊びの面白さに気づかせたい」「新しい遊びや技を生み出す面白さもある」などの記述が多く見られた。

#### ○第12回(6月30日)「家族と自分の成長」

冒頭、前時の感想用紙8名分を記載した資料を配付し、前時の振り返りを行った。前時の内容に関連して、「①遊び活動に飽きてしまった児童への支援、②おもちゃ作りをどのように工夫したらいいかわからない児童への支援」について、それぞれ考えて感想用紙に書き出すよう、課題を提示した。続いて、家族と自分の成長を扱う生活科授業の単元を取り上げた。まず2名1組の受講者を2組選び、一人が黒板の前に立ち、もう一人が黒板にシルエットを型取りすることで、黒板に等身大の型取りをすることができることを実演し、子どもたちが自分の成長を実感する方法の一つとして紹介した。続けて、教育現場において家族に関するところを取り上げる際には、家庭の事情やプライバシーに関することに最大限配慮をする必要があることを述べた上で、配布した感想用紙に、「これまで家族が自分にしてくれたことと、自分が家族のためにしてきたこと」を記入するように指示した。なお、上述の配慮に関連して、「もし事情があって家族のことが書けない、書きにくい等の場合は、友人や知人に置き換えて書いても良い」と補足した。自分自身と家族のつながりについて意識化した上で、学習指導要領の当該部分を確認し、資料を提示しながらこの単元に関する授業実践及び指導案を紹介した。

#### ○第13回(7月7日)「幼保との接続・生活科における評価」

冒頭、2008年7月に神戸市灘区の都賀川で発生した水難事故に関連する画像や映像を紹介した。生活科に

おける安全学習と関連づけて、危険を察知して災害を未然に防ぐことの大切さについて説明した。続いて、前回の授業で扱った家族と自分の成長を扱う単元に関連して、家族について深く考えることを目的とした講話を行った。生活科授業においてこの単元は、家族についての画一的なイメージに基づいて展開される懸念もある。また単にお手伝いをしたらよい、という安易な目的が設定されることも懸念される。同単元は、家族の役割や自らの役割に気づくことが主眼とされているが、実際に授業を行う際には、現代社会における多様な家族のあり方について予め理解しておくことが求められる。授業の後半は、「小1プロブレム」に関連して、幼稚園や保育所と小学校の接続や連携をどうすべきかについて、スライドを提示しながら説明を行った。また評価の観点や評価の実際について、事例を紹介しながら説明した。評価に関連して、指導案作成の際、評価規準と評価基準の違いについて解説した。授業終了時に記入した感想用紙には、「低学年の子どもたちでも理解できる安全教育や防災教育を考えていきたい」「家族の役割や形態が変化する中で、家族の多様性をふまえた生活科授業を考えなければいけない」「制作物が上手に出来たというだけの評価をしない理由が分かった」等の記述が見られた。この日の授業は、ここまで十分に触れることができなかつた複数の異なる内容を寄せ集める形で取り扱った。家族単元や安全教育については、それぞれについて一定の理解を得ることができたものの、評価に関することは理解が不十分であることが分かったため、次回の授業において再度取り上げることにした。

#### ○第14回(7月14日)「評価規準と評価基準・探検活動」

前時の授業において、評価規準と評価基準の違いについて理解が不十分であることが分かったため、その違いを意識することができることを目指し、実際の授業内容に沿って考えるためのワークシートを用意し、評価規準と評価基準をそれぞれ考える活動に取り組んだ。また後半は、グループを作り、教師役と児童役に分かれて実際に大学内を散策しながら、探検活動における「気付きを深める声かけ」等について検討する活動に取り組んだ。授業終了時には、次回の授業の課題の準備として「大学構内の環境を想定した生活科授業のアイデアをなるべくたくさん考えてくるように」と予め指示した。

#### ○第15回(7月21日)「全体のまとめ」

最終回の授業として、冒頭『ムーミンのふしぎ』<sup>6</sup>の読み聞かせを行った。本書は、第3回の授業で読み

聞かせを行ったムーミン絵本と同じシリーズのものである。ムーミンは夕焼けの色や海の色を瓶に詰めて収集しようとするが、うまくいかない。その後、仲間たちとのやり取りや様々な出来事を通じて、なぜ色が変わるのかについて認識を深めながら、色を思い出として心に残す方法に辿り着くというストーリーである。本書は情緒的な認識と科学的な認識の両方を深めながら成長していくという、生活科の両義的な特性を端的に表しているため、教材として採用した。引き続き、授業全体の振り返りをスライドを用いながら講義し、生活科授業の内容やポイントについて改めて確認した。最後に、前回の授業で予め考えてくるように指示した「大学構内の環境を想定した生活科授業のアイデア」を書き出すワークシートを配布し、記入させた。加えて、「前期の初等教科教育法(生活)の授業において、印象に残った内容を3点書き出し、それぞれ印象に残った理由も述べるように」という課題にも記入させた。残りの時間で授業評価アンケートを記入し、授業を終了した。

### 2-3 印象に残った授業内容

最終回の授業で使用したワークシートにおいて、印象に残った授業内容を3つ挙げさせた結果、上位10項目は以下の通りであった。多くの受講者にとって、映像視聴や体験的活動が印象に残っていることが分かる。

豚の飼育に取り組む長野県伊那小学校の授業記録

(映像視聴) : 51名

春探し・夏探しの活動<sup>7</sup> : 25名

遊び活動(けん玉と紙飛行機) : 25名

プレーパークの映像視聴 : 13名

受講者同士が握手をしてサインをもらう活動 : 12名

紙を作る授業記録(映像視聴) : 12名

ムーミンの絵本から生活科の気付きの特性を学ぶ : 9名

栽培活動の授業記録(映像視聴) : 8名

泥団子作りの指導案作成 : 5名

家族と自分の成長に関する単元 : 4名

### 2-4 感想用紙の工夫

今年度の授業を実施するにあたって、A6サイズの感想用紙を用意し、その日の感想や課題に対する自らの考えをこの用紙に記入させた。次の授業の冒頭において、8名分の感想用紙を選び、1枚にまとめて印刷・配布して、前時の振り返りに活用した。この方式を取り入れるにあたっては、初回の授業において「小さい

感想用紙は、特別な断りがなければ、記名のままコピーして配布し、振り返りに活用する。そのため、他人に読まれる前提で感想用紙を記入するように。」と説明し、予め受講者に理解を求めた。講義形式の授業では、受講者同士の意見交流が難しいが、感想用紙のサイズを小さくすることで、8名分ではあるものの、多くの人の意見や感想に接することができる。毎回、緊張感を持って内容を吟味しながら感想や意見を記入することを期待したことに加え、自分が書いたものが紹介されることによって学習意欲が高まることを狙ったものである。

感想用紙を選ぶ際は、内容が偏らないように配慮する他、毎回特定の受講者のものばかりにならないようにするという意識も意識した。

## 3. 本授業の成果と課題

ここまで、2014年度前期に実施した初等教科教育法(生活)の授業内容について述べた。本授業の成果と課題を示すことで本報告のまとめとしたい。

### 3-1 成果

筆者が本授業を担当するようになってから5年が経過し、この間、授業内容の改善を繰り返してきた。最終回の授業において実施した授業評価アンケート<sup>9</sup>では、「この科目を受講して総合的に満足していますか?」という質問項目に対して、59.3%の受講者が「強くそう思う」と回答し、33.9%が「ややそう思う」と回答した。この項目に対する回答の平均スコアは4.49(5段階評価)であった。授業の満足度と学習の成果が強く関連するとは限らないが、体験的活動や映像資料を活用して多様な実践に触れながら、「気付き」や「支援」など生活科授業の根幹部分について一定程度理解を深めることができたと筆者は考えている。

生活科授業は、学校内や周辺地域に固有の環境や学習資源を活用することが多いため、季節の変化や年中行事等を含めて、見通しを持った年間計画の立案が重要となる。そこで本授業の構成としては、筆者の専門分野以外の内容も多く取り入れ、生活科授業のカリキュラム全体を見通し、指導のポイントを学べることを意識した。何をどのように学ぶのかについては、今後も検討を重ねたいと考えているが、偏りなく、ひと通り生活科授業の内容と要点に触れる機会は提供することができたと考えている。

### 3-2 課題

本授業では、生活科授業の全体像について見直しを持てることを目指したため、交流活動、遊び活動、飼育栽培活動、家族と成長、探検活動等、多岐にわたる内容を少しずつ授業に取り入れつつ、指導方法に関する学習を展開した。幅広い内容を取り扱うという成果は一定程度得ることができたものの、教材研究の深まりという点からは不十分であり、また本授業だけで生活科授業を実践する力を十分身につけたと言うことはできない。他の教科と違い、多様な分野を横断する生活科授業の意義や指導のポイントを理解することは容易ではない。低学年に限定された教科とはいえ、取り扱う教材や学習対象に関する専門的な知識や深い理解が、豊かな授業実践を生み出すことを考えると、より時間をかけて、教材研究や指導方法に関する学びを深めることが何より重要である。その点は、本学科のカリキュラム構成全体にも関わる問題であり、折を見て改善を提案していきたいと考えている。

もう一つの課題としては、授業担当者の人数についてである。本授業を単独担当するにあたって筆者は、生活科授業に関する多くの文献や資料を集め、時間をかけて準備してきた。また半期ごとに授業内容を振り返り、授業改善を繰り返してきた。授業担当者として当然であるものの、生活科授業の多面性や豊かな実践に受講者が触れ、生活科授業に対して深い理解を得ることを目指せば、異なる専門性を持つ複数の担当者によって進める方式が望ましいと思われる場面もある。複数の担当者による十分な打ち合わせによって授業プラン全体を練り上げ、場合によってはチームティーチング的な要素や少人数指導を取り入れることにより、受講者の学びの質を向上させることができると同時に、授業者自身の学びを深め、成長を図ることができる。他業務との兼ね合いや授業の効率性との両立が課題となるが、FD活動をはじめとして、大学における授業改善が課題とされる現状を鑑みれば一考の余地がある。これについても今後の検討課題としたい。

### 注

- <sup>1</sup> 吉富・田村 (2014)
- <sup>2</sup> 小学校における学習環境になじめない小学1年生の状況を指す。例えば授業と休み時間の区別がつかず、授業中の立ち歩きや授業への不参加が繰り返され、授業運営が困難に陥る等の問題が指摘されている。このことについて、たとえば2014年8月21日付毎日新聞朝刊(東京版)では、「(生活科は)現在では、幼稚園や保育所から小学校生活へうまく適応できない『小1プロブレム』への対策としても評価されている」と述べられている。
- <sup>3</sup> たとえば日本生活科・総合的学習教育学会がある。
- <sup>4</sup> たとえば愛知教育大学教科教育センター(1993)がある。
- <sup>5</sup> 原作：トーベ・ヤンソン、文：松田素子、絵：スタジオ・メルファン、講談社、2008年
- <sup>6</sup> 原作：トーベ・ヤンソン、文：松田素子、絵：スタジオ・メルファン、講談社、2009年
- <sup>7</sup> 本アンケートは自由回答欄を設けて回答させたため、「春探し」「夏探し」「季節探しの活動」等、様々な書き方がなされた。そのため、関連するものを一括りにして集計した。
- <sup>8</sup> この感想用紙は、最下段まで書き込めると、平均して350～400文字程度の文章を記入することが出来る仕様となっている。
- <sup>9</sup> 61名の受講者のうち、最終回の授業に出席した60名が回答した。

### 参考文献

- 愛知教育大学教科教育センター『生活科教育の研究－授業作りと評価、大学の生活科をめぐる問題－』愛知教育大学教科教育センター刊行、1993年
- 有田和正「大学における『生活科の授業』はどうあればよいか」愛知教育大学幼児教育研究第2号、pp.21-26、1993年
- 鈴木隆司「生活科教育法における飼育活動の授業研究」千葉大学教育学部研究紀要第54巻、pp.93-98、2006年
- 吉富芳正・田村学『新教科誕生の奇跡－生活科の形成過程に関する研究－』東洋館出版社、2014年